

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 95 号 令和 2年 7月 20日
編集・発行 神戸市立中央図書館
〒650-0017神戸市中央区楠町7-2-1 (078)371-3351



東遊園地の「1.17希望の灯り」（中央区）

1・17希望の灯り

今年2020年は東京でオリンピックとパラリンピックの開催が予定されています。国内各地で準備が進められていましたが、新型コロナウイルスの世界的な感染拡大により延期となってしまいました。

大会イベントの一つに、パラリンピックの聖火リレーがあります。東京・パラリンピックの聖火は、パラリンピック発祥の地イギリスのストーク・マンデビルと、日本全国各地で採火される炎から生み出され、最終的には、東京都内において聖火リレーが行われることになっています。

兵庫県でも県内の市町で採火が行われる予定です。太陽光からの採火や、地場産業のマッチでの採火など、様々な方法が選ばれています。神戸市では「1・17希望の灯り」から採火することになっています。

震災の犠牲者の鎮魂と、生き残った人々の希望となることを祈って灯された火が、不安の多い世界の中でも希望の灯りになることを願わずにはられません。

参考：『思い刻んで 震災10年のモニュメント』

新修神戸市史―生活文化編（神戸市）

昭和五十七年の編集作業開始から、これまで歴史編、産業経済編、行政編の十一巻が刊行されてきた『新修神戸市史』の完結巻。

兵庫津、有馬温泉、六甲山開発、震災前後の地域コミュニティ等を扱う「地域と生活」。ファッション、食生活、スポーツや芸術の発祥や変遷を綴る「くらしの変化と余暇」。神戸の多様な宗教文化を考察する「ミナト神戸の宗教とコミュニティ」、遊郭や繁華街の歴史を辿る「風俗」の章からなる。神戸開港から直近の平成まで、生活文化という市民に最も身近なテーマを、最新の研究成果に基づき、わかりやすく叙述している。



古地図で楽しむ神戸 大国正美編著（風媒社）

オールカラーで掲載された古地図や絵図を、特定のテーマのもとに解説した。「色と形でみる町と村」の項では色彩や形から、寺社と民家の区別、支配者の違いなど多くの情報を読み解く。また、「海と山と川の風景」では境界の権利関係や水害への備えといった、社会背景も解く。「古地図で読む近代文学」は神戸文学館の水内真館長が執筆。作品が時代の地図と共に紹介され、時をさかのぼり、より立体感を持つて感じられる。

「神戸村文書」の世界 神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター（神戸市教育委員会文化財課）

「神戸村文書」とは当館で所蔵する近世末期の古文書である。その中心をなすのは、村の実務を執り行う庄屋などの村役人が、村で起こった出来事について領主とやりとりした記録。本書には、難破船への対応や行き倒れ人の救助など、七つの文書が載る。翻刻と現代語訳、さらに丁寧な解説が加えられており、神戸村の人々の生活を生き生きと垣間見せてくれる。

神戸の戦争孤児たち 藤原伸夫 白井勝彦（みるめ書房）

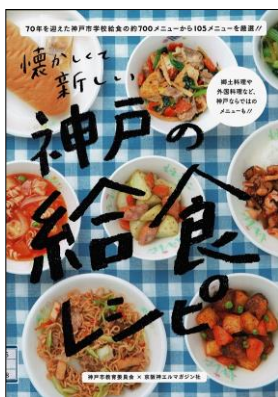
先の大戦で戦死や空襲、引き揚げ等により両親を亡くした子供は十二万人以上にのぼる。だが記録や調査は少なく、その実状はよく分かっていない。本書は神戸における戦争孤児の記録と孤児本人による証言集である。著者の二人は元神戸市職員で、長らく福祉行政に携わってきた。将来にわたり児童の権利が保障されることを願い、戦争の災禍を語り継ぐため、苦難の戦後を生き抜いた孤児たちの実像を様々な観点から解明している。

懐かしくて新しい神戸の給食レシピ 神戸市教育委員会事務局健康教育課（京阪神エルマガジン社）

他の大都市に先駆けて、神戸市では昭和二十五年から学校給食が開始された。約七百あるというメニューの中から行事の献立や、郷土料理や外国の料理など多彩なメニューのレシピが家庭で再現できる分量で紹介されている。レシピの他にも献立の作成過程や食材の調達、給食当番の仕事などで、子供たちを育む神戸の給食のすべてがわかる。

精神科医・安克昌さんが遺したもの 河村直哉（作品社）

阪神・淡路大震災のあと、被災者の心のケアにあたった精神科医・安克昌^{あんかつまさ}氏の葛藤を描く。妻と二人の子供、そしてもうすぐ生まれる三人目の子供がいる彼は、ある日、癌を患っていることを知る。長年被災者に寄り添い、誰よりも心の傷について知っているからこそ、周囲の人に不安を与えまいと振舞うが、その変化を感じた家族や友人もまた、彼の気づかないところで共に闘っていた。もしも近くに苦しい思いをしている人がいた時、自分には何ができるのか、読みながら何度も考えさせられる。



芝居小屋戦記―神戸三宮シアター・
エートーの奇跡と軌跡 菱田信也
(苦楽堂)

二〇一七年、三宮駅前に忽然と
小劇場が現れた。小規模ながら贅
を凝らしたこの劇場の立役者・女
性支配人の姿が綴られている。

芸術監督を務める著者は、三宮
育ちの脚本家・演劇人だ。地元神
戸への愛着や、プロデュース製作
への思い入れ、個性的なスタッフ
の面々、三年間の興行内容と失敗
談、具体的な金銭収支など、「芝
居小屋」の舞台裏を紹介する。

灘校物語 和田秀樹(サイゾー)

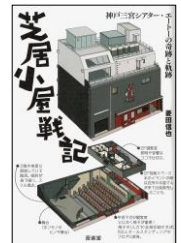
日本屈指の難関校出身の著者が、
体験を元に書いた小説である。描
かれているのは塾通いを経て入学
したものの、秀才たちに囲まれて
自分を活かせず苦悩する少年の姿。
深夜ラジオに安らぎを求め、落選
続きの生徒会選挙活動に力をそそ
ぎ、映画に傾倒するうち、将来計
画は二転三転するが、数学の要領
を掴んだことを契機に、自ら立て
た戦略で受験を勝ち抜いていく。
人との順位を測りがちな主人公と、
彼を許容する友人たちとの青春の
日々を描く。

ほんまに VOL. 20 くととうて
ん編集・発行

神戸発、本好きのための雑誌が
二年ぶりに発行され、特集「本を
売る」と題して、神戸の書店をと
りあげた。地域に根差した書店の
ほか、近年市内に増えてきた古書
店の若い店主たちの顔も見える。
連載「横溝正史作品と神戸」や、
元海文堂書店の平野義昌氏による
「俵万智『牧水の恋』」など、読
書欲をそそられる文章が並ぶ。
「令和に聞く戦前戦後のわいらの
神戸新開地」という昭和一ケタ生
まれの方への聞き書きも興味深い。

ほんのちよっと当事者 青山ゆみこ
(ミシマ社)

自己破産未遂、不仲気味の母親
の看取り、認知症を発症した父親
の介護、軽度の聴覚障害など、
ニュースや新聞、SNSを騒がせ
知っているつもりだった社会問題
に「当事者」として向き合った経
験を綴る。
著者は神戸市生まれ。困りごと
や生きづらさが「他人事」でなく
なることが、他者への想像力とな
り、ふくよかな社会につながるの
ではと語る。



小磯良平「彼の休息」
東京美術学校の卒業制作 モデルは竹中郁

神戸 その19
あんな人こんな人

竹中 郁 たけなか・いく
明治37年(1904)～昭和57年(1982)

「そんな名はやめときなはれ、神戸開港百年記念事業なのやから、百年島がよろしいやおまへんか。須磨の高倉山をつぶした土でできたのやから高倉島でもよろし、ナンナラ、あんたの原口島でもよろし」ポートアイランドの名前をめぐる原口忠次郎(元神戸市長)との軽妙なやりとりが、晩年に執筆した神戸にまつわる随筆集『私のびっくり箱』に綴られています。

竹中郁は兵庫区で生まれ、養子先の裕福な商家に育ちます。神戸二中(現兵庫高校)を経て関西学院英文科を卒業。才気あふれる仲間と青春時代を送り、生涯の友となる洋画家・小磯良平とは神戸二中で出会います。大正12年、北原白秋主宰『詩と音楽』に投稿し新進十一人集の一人に選ばれ詩へと向い、翌年に海港詩人倶楽部を設け詩誌『羅針』を創刊、その後、処女詩集『黄蜂と花粉』を出版します。欧州留学後に出版した詩集『象牙海岸』は「ラグビー」等シネ・ポエム形式を試み、モダニズム詩の代表作品として高く評価されます。戦後は、児童詩誌『きりん』を創刊、坂本遼、足立巻一らと児童詩の育成に尽力しました。また、二百篇を超える校歌・社歌を作詞しています。



船来品を着こなす贅沢でお洒落な神戸紳士の風貌、生涯神戸を離れなかった生粋の神戸っ子、近代的な明快さと機智に富んだ詩風と神戸を象徴する詩人は九冊の詩集を残しています。

参考: 『竹中郁全詩集』(角川書店) 『私のびっくり箱』竹中郁文と絵(神戸新聞出版センター)
写真: 『R. KOISO』(小磯良平画集刊行会1965) 『現代日本詩人全集 第13巻』(東京創元社)

|| 新しく入った本そのほか ||
神戸に咲く一輪の薔薇―闘い切った
1119日間 松原裕(星湖舎)
すまうら文庫―あなたと本と、
(すまうら文庫)

光源氏が描いた須磨の景色

平安時代中期、十一世紀初頭に宮中の女房であった紫式部によって執筆された『源氏物語』は、桐壺帝の第二皇子として生まれ、美貌と才能に恵まれた光源氏の栄華と苦悩に満ちた生涯を描いた長編小説です。五十四帖で構成され、それぞれの巻に「桐壺」「空蝉」「若紫」などの巻名が付いています。

第十二帖の巻名は「須磨」。父桐壺帝の崩御の後、兄朱雀帝の寵姫で、政敵である弘徽殿の女御の妹でもある朧月夜との関係が発覚し窮地に陥った光源氏は、流罪に処される前に自ら都を離れることを決断します。蟄居する先として選んだのが須磨でした。

紫式部は光源氏の須磨への流離を描くのに、源高明、菅原道真など都から追放された人物のイメージを重ね合わせました。その中でも特に、かつてこの須磨の地に流された歌人・在原行平を強く意識し、光源氏の住まいを実際に行平が住んでいた場所の近くと想定して筆を進めます。

「おはすべき所は、行平の中納言の藻塩たれつつわびける家居近きわたりなりけり。海づらはやや入りて、あはれにすぎげなる山中なり。」

『源氏物語』は紫式部の創作ですが、須磨に光源氏ゆかりの場所が生まれ、古地図にも書き込まれました。須磨寺町にある現光寺は「源氏寺」とも呼ばれ、光源氏のわび住まいの場所とされています。門前には大きな石碑があり、本堂の襖絵には須磨で月を眺めながら都を思う光源氏が描かれています。



現光寺門前の石碑
「源氏寺」と刻まれている

都を離れたのは三月、それからおよそ一年を光源氏はこの住まいで暮らしました。日々読経をして過ごし、時折紫の上や藤壺、朧月夜など関りのあつた女性たちと文を交わす他、須磨の景色を絵に描いていました。

近くに仕える者たちは墨で描かれたこれらの絵を見て、都にいる名人に彩色させて作り絵にしたいものだと話します。それほどに光源氏の絵

はずぐれた出来栄えだったのでした。

都を離れた直後には光源氏と文を交わしていた都の人々も、弘徽殿の女御が聞きつけて怒りをあらわにすると、不興を買うのを恐れて便りをしなくなりしました。

寂寥の中で秋が過ぎ冬を迎え、やがて春がきます。

「須磨には、年かへりて日長くつれづれなるに、植えし若木の桜ほのかに咲きそめて、空のけしきうららかなるに、よろづのこと思し出られて、うち泣きたまふをり多かり。」

須磨寺にある「若木の桜」は、光源氏が植えた桜だと言われており、これが須磨区の「桜木町」「若木町」の町名の由来です。

その桜が咲くころ、都から友人である頭中将が訪れ、光源氏との再会を喜び合います。頭中将の目に映る須磨の住居は唐風でとても風情があり、光源氏は貝を持ってきた海人と直接やりとりするなど、土地に溶け込んでいく様子が書かれています。

憂愁の日々を過ごす光源氏は、三月上旬の巳の日に禊ぎをすることをすすめられ、旅の陰陽師を呼んで巳の日祓いをさせました。

須磨区関守町にある関守稲荷がその場所だと言われており、「巳の日稲荷」とも呼ばれています。

祓いを始めると突然雷が鳴り出し、大暴風雨になりました。

光源氏の夢枕に海竜王の使いが現れて、須磨の地を離れることを示唆し「須磨」の巻は終わります。



光源氏が巳の日祓いをしたとされる関守稲荷

その後許されて都に帰った光源氏は、兄の朱雀帝の退位後に即位した冷泉帝の後見として勢力を伸ばしていきます。

その冷泉帝の御前で、かつて須磨を訪れた頭中将と競い合った絵合で、光源氏側が最後に出したのは須磨の風景を光源氏自身が描いた「須磨の巻」と呼ばれる絵でした。浦々や磯の様子を隈なく描き表したこの絵にその場の誰もが心を奪われ、絵合は光源氏側の勝ちとなったのです。

参考文献

- 『こうべ文学散歩』『ひょうご社寺巡礼』
- 『神戸の遺跡と文学』『古地図で楽しむ神戸』
- 『神戸の町名』『海の文学史』他